9 SEPTEMBER, 1982

教皇様の聲

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticano の転載許可済
©1982 精道教育促進協会 ☎(芦屋)三二・三四五二 芦屋市船戸町12—6

生ける神の御力

キリストは、人間の神秘の知られざる一面を示す

（しばらく中断してしまいましたが、以前続けていた「からだ」についての神学的考察を、今日から再開したいと思います。）

話を続けるにあたって、キリストが復活についてお話になっている福音書のことばを読んでみるのがよいと思われます。そのことばは、キリスト教の目からみれば結婚とは何か、「天の王国」のために夫婦生活を「放棄する」とはどういうことか、を理解するために非常に大切な箇所です。

旧約聖書の結婚についての教えはあまりにも事細かで複雑なために、ファリザイ人がキリストに結婚の不解消性について（マテオ19・3～9、マルコ10・2～12参照）問いかけただけでなく、サドカイ人まで、別の機会ではありましたが、レビラト婚についてたずねに来るほどでした。共観福音書はいずれもそのときの話し合いを記しています。三つの共観福音書の記述の仕方は、わずかのちがいを除いてほぼ同じなのですが、そのわずかなちがいには重要な意味があります。マテオ、マルコ、ルカが三様の記述を残し、しかも、それが、「からだの神学」にとって重要な内容を含んでいますから、それぞれの箇所を詳しく分析してみる必要があるでしょう。

聖書には、キリストが「はじめ」（マテオ19・3～9、マルコ10・2～12参照）についてお話になるところと、人間の深み（心）に呼びかけて肉の望みや欲情が罪の源（みなもと）（マテオ5・27～32参照）であることをお示しになる箇所との二つがありましたが、いま調べてみようと思うところは、「からだの神学」にとって一番大切な三重の教えの三つ目にあたります。この三つ目のところでキリストは、復活についてお話になりますが、そうすることによって、人間の神秘の知られざる一面をみせてくださいました。

からだのこの一面は、（聖書全体を熟読すれば聖書と深い関係をもつことがわかりますが、）「復活を否定していた」（マテオ22・23）サドカイ人とのやりとりのなかで示されました。彼らは自分たちの復活否定を証明するために、キリストに問題を出すわけですが、それは、「復活の仮説」の矛盾をつくはずでありました。サドカイ人の言い方は次の通りです。「先生、もしある人に兄がいて、その兄が死んで子がなく、妻が生きていたら、その兄弟がそのやもめと結婚して、兄のために子をもうけよ、とモーゼが命じています。」（マルコ12・19）つまり、サドカイ人はレビラト婚（第二法の書25・5～10参照）という旧約の規定を根拠に次のような場合を問題にするわけです。「ところで、ここに七人の兄弟があり、兄が結婚して子なしで死に、次の弟が彼女と結婚して、また、子なしで死に、第三の弟もそのようにして七人とも子なしで死に、ついにその女も死にました。さて復活のとき、彼らがよみがえったら、その女はだれの妻ですか。七人とも彼女をめとったのですが……）（マルコ12・20～23）

これに対するキリストの答は、福音書の（要（かなめ））となっています。その答のなかでキリストは、ただただ人間的な面から始め、そのような面とは対照的に、もう一つの面、つまり、神の知恵と御力について触れておられるのです。同じようなことはほかにもありました。たとえば、チェザルの像を刻んだ貨幣と、チェザルのつまり人間の権能と、神の権能との関係（マテオ22・15～22）の場合です。

話をもどしましょう。イエズスは次のようにお答えになりました。「あなたたちは、聖書も、神の力も知らないから、あやまった考えをもったのだ。死者からよみがえる時は、めとりもせず、とつぎもせず、天の天使たちと同じようなものである。」（マルコ12・24～25）これは、今問題となっていることがらの根本的な答です。キリストは、サドカイ人の考えを知り、彼らの質問の裏を察知しておられましたから、すぐに、サドカイ人が否定していた「復活の可能性」についてお話しになります。「死者の復活については、モーゼの書の茨の編に『私はアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』と神は申されたと書かれてあるのを知らないのか。神は死者の神ではなく、生きる者の神である。」（マルコ12・26～27）おわかりのように、キリストは、サドカイ人がとりあげたモーゼを引用し、最後に結びとして、「あなたたちの考えは大いにまちがっている」とおっしゃいました。

キリストがこのように決定的なことをおっしゃったのは二度目です。実は、復活について話をなさるとき、「あなたたちは聖書と神の力を知らないからまちがったのだ」（マテオ22・29）とおおせになりました。マルコでも、「あなたたちは聖書と神の力を知らないから誤った考えをもったのだ」（12・24）とあります。ところが、ルカの福音書（20・27～36）をみると、「大いにまちがっている」というような論争的な調子はみられません。ただし、マテオもマルコも触れないことばをキリストの答えに含めることによって、結局は他の二つの福音書の場合と同じことをルカは伝えているのです。聖ルカの福音書にはこう書いてあります。「この世の子らは娶ったり、嫁いだりするが、来世を受け、死者のなかからの復活にふさわしいとされた人々は、娶りも嫁ぎもしない。彼らにはもう死ぬことがないからである。彼らは天使に似た復活の子らであり、神の子らである。」（20・34～36）復活の可能性そのものについては、ルカも他の共観福音史家と同じく、モーゼに言及しています。つまり、出エジプト3・2～6で、そこでは旧約の偉大な立法者が「燃え上ってはいても燃え尽きない木の茂みの奥から聞えることば」を記しています。「私は、おまえの父の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。」（出エジプト3・6）同じとき、モーゼが神のみ名についてたずねると、「私は《在（ある）ものの》である」とお答えになりました。（同3・14）

以上のように、未来の体の復活については、キリストは生ける神の御力についてお話しになったのです。（一般謁見、一九八一・十一・十一）

アンジェルスメッセージ

1　人間は、ほんとうに自由に自分の行ないに責任がとれるでしょうか。

〈お告げの祈り〉の機会を利用して、司教会議のテーマ「教会の使命における和解とつぐない」について、ふたたび考えてみましょう。このテーマについては、シノドスに招かれた司教のみではなく、いわばみなさん方全員が考えなければなりません。このテーマには底に流れる大切な点がひとつあり、根本的な問いかけをしていますし、問いに対しては責任をもって返事をしなければなりません。そしてその問いかけとは、冒頭に思いだしていただいた、次のことばです。「人は、ほんとうに自由で、自分の行ないに責任がとれるでしょうか。」

2　なぜ、このような問いかけをするのでしょう。なぜかと言えば、人は自由でなければ自分の行ないについて何も決めることができず、自分の行ないに責任をもてなければ、つぐないと、神との和解への呼びかけも、何の意味をも持たないことになるからです。

キリストは、「悔い改めて、福音を信じなさい」(マルコ1・15)とおおせになりましたが、それを聞くわれわれは、このキリストの呼びかけには意味があること、すなわち、人は償いをし、罪を告白して、改心すべきであるという事実にもともとから気づいております。

ところで、一般に現代の人々は異なる考え方をもっているようです。人間は一連の条件に取り巻かれており、そのような条件によって行動は左右され、結局、あらかじめ意図された影響を強く受けていると。現代人は、抵抗もせずに、数々の要素にあやつられるがままになっている。(…)とにかく人間、自由でもなく、善悪の判断ができる状態にもいない、と考える傾向であります。人間とは、あらゆる面で制限を受けている〈モノ〉、色々な力の〈結果〉のようなものであると考える。内外からの力や条件に抑えつけられているので、人間は自由でありえないと思いこんでいるようです。

3　「悔い改めて、福音を信じなさい」というキリストの呼びかけには、どのようなねうちがあるのでしょうか。教会の使命のうちで、神との和解と償いにはどのような意味があるのでしょうか。

いずれにしても、キリストの呼びかけの相手は、一人ひとりの人であり、呼びかけの目的は、人が自分を見いだすように、という点にあります。

人はみずからを信じ、数々の条件づけにもかかわらずほんとうに主体性をもってみずからの行ないを決め、行ないの善悪判断をして、その責任をとることができる、これを信じよ、というのがキリストの呼びかけなのです。

自分のほんとうの自由、ほんとうの尊さをすててはならぬ、という教えでもあります。

改心と呼びかけ、人間性の根本的な意味、をふたたび思い起こさせてくださるキリストに讃美。キリストのみことばが万人の心をゆり動かすことができますように。(一九八二・三・七)

キリストは人々の光

主は人生に意味を与え、人間の偉大な尊厳を教えてくれる

〔二月二日、火曜日の午後、神殿への主の奉献の祝日に、教皇さまは、聖ペトロ寺院でのみことばの祭儀において、ろうそくを祝別し、次の説教をなさった。〕

異邦人をてらす光

この言葉がはじめて響きわたったのは、初子を伴う母親たちが清めの式を受けていたイエルザレムの神殿でのことでした。

これは、一人の年老いた預言者シメオンが口にしたことばです。

ベトレヘムで生まれたみどり子を神殿に連れてきたマリアとヨゼフの前で語ったことばでした。

このことばはただ一ヵ所で鳴り響いただけとはいうものの、そこに宣言されている真理は、神殿全体をみたすものでした。つまり、メシアを期待してイスラエルの神に捧げられた、場所全体をみたしたのです。(…)

「異邦人をてらす光、み民イスラエルのほまれ」(ルカ2・32)

キリストのしるし

本日私たちは、シメオンの言葉を繰り返しながら、聖ペトロ大聖堂へと入ります。

みんなならんで、「すべての人をてらす」(ヨハネ1・9)光のしるし、ろうそくをかざしながら。ベトレヘムに生まれたキリストのしるし、神殿にささげられたキリスト、「さからいのしるし」(ルカ2・34参照)に照らされながら。

私たちは、このしるしにあらわされるキリストを信じます。当時の人々はいつもキリストにさからっていたではありませんか。その人々の子供たちに、キリストはつかわされたにもかかわらず。そう、そういうことです。人々はさからいました。その光を消すために、人々はキリストを死刑にしたのです。

シメオンは、母マリアにこの死を預言して語ります。「あなたの心も、剣で貫かれるでしょう。」(ルカ2・35)

十字架上の死も、キリストの光を消すことはできませんでした。キリストが墓で死ぬようなことはなかったのです。

私たちはいま、光を手にして大聖堂に入ります。その光は十字架につけられ、復活したキリストのしるしです。

十字架と復活において、シメオンの預言は文字通り実現しました。まさにキリストは、

■人間のちっぽけな心でも、キリストの光でみたされて、みずからをささげる場、神殿となるならば、どれほどすばらしいことが実現できるか、よく考えてみましょう。

説教・講話・書簡等の抄訳

さからいのしるし、光のしるしであったのです。

さからいのとき

キリストは、このしるしを示しながら人類史のなかに入りこまれたのではありませんか。キリストは、人間の歴史の様々な場面で私たちの前にお現われになったのではないでしょうか。人々が主キリストにさからわないような時代はありませんでした。このさからいの中で、人々を照らす光が、ことあるごとに繰り返し示されてきました。

現代ほどあらゆる方法でキリストへの反逆がくりかえされる時代はないのではないでしょうか。

まさしく今世紀こそ、キリストが人々を照らす光としてのご自分を、再びお示しになっているのではないでしょうか。

「異邦人の光なるキリスト……」この言葉が、「教会憲章」の主文の冒頭を飾ります。

私たちはこの明白なしるしを見て、マリアの子としてベトレヘムで生まれたキリスト、神殿で奉献され十字架につけられ復活したキリストへの信仰を告白するのですが、そのしるしは、単純であるにもかかわらず大変豊かな内容を秘めています。生命の豊かさがあります。実に、「生命は人の光であった」(ヨハネ1・4)のですから。

キリストは人生の光です。主が光であるのは、闇を追い払ってくださるからなのです。主は神秘を明かすがゆえに光です。キリストは根本的に大切な質問に即答してくださるからです。主は人生に意味を与えるがゆえに光です。キリストは人間の偉大な尊厳を教えてくださるから光であらせられるのです。

かってマリアとヨゼフが、メシアを待ち望みつつ旧約の寺院にのぼったように、今日私たちもこの光に導かれてローマの聖ペトロ大聖堂にやって来ました。

私たちがここにいるのは、主の奉献の秘義をふたたび体験するためです。神殿での奉献は、たくさんのことのモデルとなり、霊感の源となってきました。

奉献はまた、人生を照らす光でもあります。私たちはこの奉献の光をうけて、キリストにおいて生きるのです。

「霊的な供え物」を奉献する人の心のおかげで、全世界は宇宙の巨大な神殿に変容したのではないでしょうか。(…)

人間のちっぽけな心でも、キリストの光でみたされて、みずからをささげる場、神殿となるならば、どれほどすばらしいことが実現できるか、よく考えてみましょう。

あなたの光を輝かせなさい

私は、教会の子である修道者や修道女のみなさんのことを考えています。

私はあらゆる人々に語りかけています。キリストが、「おつくりになった神のための司祭の王国」、その王国の民全体を考えながら。

しかし、特に今日、キリストの光を携え、ここに集うみなさん方、そして全世界の兄弟、姉妹たちに語りかけているのです。とりわけ、重い十字架を担っている人たちのことを考えています。

キリストの恩寵の光に導かれて修道誓願をたてた人たちの、聖なる奉献の光が、心の中で燃え続けますように。燃え続け、そして人人を照らすことのできますように。

この灯を隠さないでください。純粋に福音的な輝きを消し去ってはなりません。

永遠の光を目指して、巡礼の旅を続ける神の民全体にとって、みなさん方はなくてはならぬ存在なのです。

イエルザレムの神殿におけるキリストよ、御身の奉献の神秘によって私たち全員を新たにしてください。御身の母のとりなしによって、「近づきえない光のうちにお住みになる」(ティモテオ前6・16)御方のほうへ、忍耐強く歩みをつづけることのできますように。アーメン。

(一九八二・二・二)

大学と教会

(…)なぜ大学は教会を必要とするのでしょうか。すでにお話したように、大学の第一の目的は、無私の心で、しかも情熱をかたむけて真理を求めることです。人を自由にし、人間の尊厳と価値を見失わずに人をより人間的にするのは真理です。とすると、人間についての真理追求に特別人々の注意をひきつけないわけにはゆきません。真理追求こそ大学の関心事であるからです。

ところで、第二ヴァチカン公会議は、現在の神学研究について次のような観察をしています。

「文化を作りあげる要素が量的に増し非常に広範囲な分野にわたっているので、それら全てを理解し統一することは一個人の能力を越えている。『普遍的人間』という理想像はほとんど消えてしまったのである。」(『現代世界憲章』61)公会議の文書は続けて次のように宣言しています。「現代の科学と技術の進歩は、ある種の現象主義と不可知論とを助長する。そうなるのは、不当にもこれらの学問の用いる研究方法があらゆる真理を発見するための最高の法則であると考えられているからである。」(同右57)

こうなると、人間についてあいまいな知識をもったり、誤りを犯したりする危険がでてきます。これは、人間についての知識をある面だけにとどめることなどできないことからも明らかなことです。あるいはまた、人間が知恵ある生活を送ることができなくなっていることも考えられます。ところで、この知恵こそ、大学が固有な研究で求める真実、また究極の目的なのです。

ほんとうにすぐれた研究者であれば、研究にしろその研究の適応にしろ、人間の霊的倫理的面や、霊的倫理的面からでてくる人間の価値を無視することはできません。人間には究極的とも言うべき意味があり、個人の生活および社会における生活のねうちは、その究極的な意味にかかっているのです。

以上のような点を考えると、当然、大学は教会を必要とする、ということの深い理由がわかるのではないでしょうか。事実、教会は、この真理、つまり人間の究極的な意味の証人です。なぜなら、教会こそキリストを告げ知らせる義務を負っており、キリストの秘義のうちに、一人ひとりの人間の秘義、一つひとつの現実の秘義が明らかにされているからなのです。

教会から離れた大学はあらゆる分野での真理についての知識を得ることができなくなる、つまり、根本的な目的を達することができなくなってしまうのです。

教会と大学とが深い絆で結ばれていないとなれば、被害を被るのは人々である、ということになります。信仰が文化をうむことも、文化が人間化されることもなくなるからです。そうなれば、あらゆる人々が今日、意識するか否かにかかわらず、必要だと認めている創造と救いの「知恵」が、文明と手に手を組んで歩むことはできなくなります。「知恵と愛」の文明を目指す進歩がみられなくなってしまうのです。

(一九八二・三・八)

不変の教え

聖母には忠実、キリストには従順

〈ローマの神学校でのお話〉

本日イエズス・キリストは弟子と共に私たちをお集めになりました。私たちは今、キリストと教会との一致を祝います。それは、婚姻の秘跡にも表われる愛の契約であります。カナの婚姻と同様、私たちの祝いに欠けるものは何もありません。イエズスの弟子として集う私たちは、イエズスに伴われて力を得、主と一層親しくなり、過越しの晩さんにあずかります。イエズスの御母がここにおいでになることも知っていますから、人生の旅路が安全であることを確信し、安心できるのではないでしょうか。(…)

ここでは、神の恩寵に助けられて、それぞれ司祭が司祭職の理想を追求しつつ生活しておられる。(…) ここから司祭職の理想が神学校や教区に伝えられる。ここでは、救いの福音を宣べ伝えるために若い司祭が遣わされるとはどういうことか、を深く考えることができる。この場は、人々にとって大きな希望の源、イエズス・キリストの聖心にそった司祭を期待する希望と祈りと懇願の中心であります。

(以前) 司祭と神学生のみなさんにお話した際、教会はいかに司祭を必要としているかを強調いたしましたが、今日は、神学校が使命を果すなら、教会の必要に応じる司祭にとっていかに大きな助けとなるかという点を加えたいと思います。神学校においてみなさんは、ご聖体の秘跡の力を得、祈りと愛と熱心にあふれる共同体を作りあげる機会をおもちになっている。神の民のために、和解の聖務者、深い内的改心の使者、になる準備をするみなさんは、まずご自分でこの秘跡にあずかって、赦しの秘跡への愛をませば、教会が今日望むようにこの秘跡を優先的に考えることができるでしょう。この共同体のなかで、自分の教区の状況を神のおことばの光に照らして考え、将来をみつめることがおできになる。祈りと黙想、熱心な勉学のうちに、主はみなさん方に語りかけ、人々の幸せのために心を燃えあがらせてくださるでしょう。みなさんはますます自覚なさることでしょう、福音宣教がいかに急を要するか、教会がどれほどみなさんを必要としているか、キリストはみなさんの手を借りることになさったのですが、救いのみわざを続けるために、キリストがいかにみなさんを必要としておられるかを。それと同時に、ほんとうに効果的に司祭職を果し、大司祭キリストのまことに有能な協力者となるために、いくつかの条件を果すべきこともすでにご存知だと思います。

キリストとの親しさが必要

(以前) このような条件についてお話いたしました。まず第一に、弟子たちとキリストとの親しさを思い、それと同じキリストとの親しさを身につけるよう要求されています。弟子たちはキリストの親しい友、ご自分でお選びになった伴侶、お考えをわかち合い、御父からお受けになった使命を託すべき友でありました。第二の条件、それは、司祭的一致のうちに保つべき司教との一致でしょう。イエズスは、私たちの司祭職における目にみえる一致に、ご自分の内的な力の源、つまり、御父との一致が反映するようお望みなのです。昔から教父たちはこの点をしげく強調してまいりました。神の民に仕えるための第三の条件は、私たち自身をあますところなくキリストにささげることであります。独身を保ち、全てを主にささげる私たちは、「キリスト全体」をなす人々をより深く愛する力を賜としてうけます。私たちを司祭職へお召しになるキリストは、心おしみせず、犠牲をいとわぬ愛に生きよ、と招いておられるのです。

マリアには忠実、キリストには従順を

キリストにおいて洗礼を受けた私たちは、御父から聖性への招きをも受けましたが、この辺の事情について、聖パウロは次のように教えています。「神は世の創造以前から、キリストにおいて私たちを選び、愛によってご自分の前に聖である者、汚れない者とされた。」(エフェゾ1・4) ここにいるみなさんにとって、このことばは特に力強くひびくことでしょう。聖母の胎内で人となった瞬間に大司祭としてたてられた御独子、そのイエズスと一つになった私たちにとって、(神の) 養子として生きるということは、さらに深い意味をもっています。(…) 聖母マリアは、御子の司祭職にあずかる者にとって、より近い存在です。(ヨハネ2・5では)、いつもの沈黙とはちがって、まわりに居る人々に向かい、聖母は次のような勧めをお与えになります。「なんでもあの人のいう通りになさい。」 これは、聖母に忠実をつくし、キリストに従うなら、どのようなすばらしい結果がでるかを教えてくれる箇所で、キリストは福音を伝える仕事にあたり始めての奇跡をなさったことが記されてあるところです。

マリアは今日も、「なんでもあの人の言う通りになさい」と勧めをくりかえしておられる。聖母には忠実、キリストには従順、—こうすれば、きっとよい結果が続いてあらわれるにちがいありません。イエズスは、教会の必要をみたすため、私たちの無力をかえりみず、御力と愛の〈しるし〉をかならずしめしてくださるでしょう。

みことばを告げる

注意深く耳をかたむけると、イエズスのみ声がきこえてきます。福音宣教に備えよ、万人のための良きしらせ、救いの福音を、私自身のことばを使って告げ知らせるために。「神は御独子を与え給うほどこの世を愛された。それは、彼を信じる人々がみな亡びることなく永遠の命を受けるためである。神が御子を世に送られたのは、世を裁くためではなく世を救うためである。」(ヨハネ3・16～17)

マリアのいうことに耳を傾け、イエズスに従うなら、福音宣教を続けるために摂理的な役目を果すことができるでしょう。(…) みなさん、イエズスの御母がいつもここに居てくださることを忘れないでください。今もこれからも、ずっとみなさんの将来の仕事の準備を通してお助けをお与えになります。聖母は、みなさんの国での福音宣教の旅につねにつきそってくださるでしょう。

聖母のおことばに従って、イエズスのおことばに耳をかたむけ、イエズスのまねきに応えてください。主は、ご自身ともっと親しくなれ、司教と一致せよ、福音宣教のために、全てをささげて独身を保つ者の、寛大で忠実な愛をあらたにせよ、と招いておられる。

みなさんがどこにおいでになっても、「イエズスの御母はここにおいでになる」と言えることでしょう。

(一九八二・一・三〇)

『教皇様の声』 ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙 ■毎月 十日発行 ■定価 一部六十円送料六十円 ■一年予約七百二十円送料七百二十円 ■二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替 神戸 3-72393